

編集室から

この8月は、例年に無く多忙を極めていました。気付いたら、ほとんど休みが無いような状態。出張は数知れず、お盆も来客対応や、大阪への日帰り研修等、結局のところ一日も休めずあっという間に駆け抜けた感じです。

さらに、月末には長年コーディネータを仰せつかっている石川地域づくり協会が事務局となる地域づくり全国研修交流会石川大会が開催され、分科会・全体会と連日のコーディネート。県大会としては、毎年開催しているのですが、やはり全国大会となると、無意識に気が張っていたのかも知れません。

すべての日程が一段落した翌9月1日から完全に寝込んでしまう状態に陥りました。起き上がって来客・会合に何とか対応できたのは、なんと4日後。単身赴任先でのことですから、食事は自前。何を食べたかも記憶にありません。

ところが、不思議なもので翌5日から1泊で東京出張が急遽入るも体調絶好調で、知人に勧められるままに深川不動尊・川崎大師と巡礼。夜は友人と会議を経て、川崎泊。

問題は、さらにその翌日。つまり之を書いている今、なのですが、声が出なくなりました。クーラーの乾燥風に不調気味の喉がやられたと思うのですが...

この国では、子供の頃から「頑張る」事を推奨されて育ちます。もちろん、それは悪いことではないのですが、行き過ぎて凝り固まって「ガンバル教」的レベルに至ると、問題です。自分の身体を酷使していることにすら気付かず、爆走する。ある時、體が悲鳴を挙げて疾病ないし体調不良に陥る。ところが、本質的にガンバル教のままだから、治るとまた爆走始める...。そんな因果応報の輪廻の中を自分が無間に回っているとは露知らず。

引越しできない體を護るためにも、ガンバル教から脱会することにします。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2015/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2015/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

長 月



能登・薬師の里にて
by hama

大阪の寝屋川で起こった中一殺人事件。四十五歳の男性容疑者が逮捕されるまでの、マスコミの憶測に驚いてしまいました。

同級生の男の子が「犯人臭いよね」的の報道を中心に、この子以外でも、「絶対に子供が犯人」のコメントや報道の仕方がほとんどでした。

そして、同級生の男の子が行方不明なのは、容疑者であり、それを親が隠しているとまで・・・

「想像力がたくましいですね」などの一言で済まされない、「社会現象」ではないかと・・・ふと頭をよぎりました。

で、このマスコミの報道を「本物の情報」として受け取った人の思考は：

「ほんとに近頃の中学生は残虐なんだから。親のしつけが悪いのよ」「どうせろくでもない子なんですよ。親の顔が見てみたいわ」「また未成年が集団で事件起こしたっていうことでしょ」「近頃の中学生は怖い子ばかりで、世の中危ないわよね」

いやいや、「マスメディアの憶測」の報道を、本物の情報として受け取って色々と自分自身が憶測を立てている域ですが・・・

ここに一つの想念みたいなものが浮かび上がってきます：「私たちの憶測が本物であってほしい。そうしたら嬉しい」

で、男性が容疑者として逮捕されると、同級生の男の子のことやその親を悪く言っていた自分をすっかり忘れて、憶測が当たらなかった方のことになりがちです。

濱のうぶやき 『空気観』

「日本人とユダヤ人」などの著者として有名な山本七平氏に「空気の研究」という著書がある。ここでいう「空気」とは大気のことではなく、「場の空気」の空気である。

同書の冒頭章に、吉田満氏の『戦艦大和の最期』からの引用で「全般の空気よりして、当時も今日も（大和の）特攻出撃は当然と思う」という当時軍令部次長だった小沢治三郎中将の言葉が掲載されている。「大和」は既読であったので、その前後も同時に思い返した。

少なくとも先の大戦で、この国の行く末は、なんと事も在るうちに「場の空気」で決められていた、ということである。「場の空気」だから、後いかに取材し、分析しようとも、決断の根拠は明白にはならない。どういう過程で至った結論であるかさえ、たとえ議事録が残っているそれを深読みしても不明瞭になるのは、「場の空気」は甦らないからだ。

「空気の研究」を読み進めるうちに、気付いた事がある。学校での級友からの虐めも、そのクラスの中で「特定の子を苛める空気」ができている結果である。自身も転校生でよく虐めに遭った。それを突破した体験を思い返してみると、何らかのきっかけで自ら「場の空気」に働きかけ、それを変えられたからだ。

時折報じられる猟奇的な事件も、引籠もって自分だけ

人間が最も無意識にしている、自分自身でも認めたくない（どちらかというと、気付かずスルーしているかと・・・）「残虐性」が垣間見られるのは気のせいでしょうか？

世の中の人の、皆がそうではないですが、情報に踊らされるということは、本物の情報を受け取り損ねるだけでなく、自分自身の思考にも歪みを与えていくんだなあと思いました。

本物の情報を受け取れる人は、このような流れに、自分自身を持っていきません。

まず、今回の報道のような「憶測」に対して、「まだはつきりとしたことはわからない。憶測でもは言えない」という自分自身のスタンスをきっちり取っています。マスコミの情報「憶測の域」とちゃんと踏まえた上で、自分はそのようなことはしないのだ、ときっちりとしています。

「本物以外はいらない」と、自分で自己決定しているのです。

ネットが発達し、情報量がとてつもなく多くなった現在だからこそ、憶測に惑わされることを、極力少なくて出来るのが重要になってくるのだわ・・・と。

そして、憶測自体が悪いことでなく、憶測を良い方に活用できるようにしよう！

これらの折り合いと調和を自分の中に創造していき・・・と、私が私自身に即座に語りかけたのでした。



【プロフィール】（いしかわ ひろよ）日本人力プロデューサー。人間観察力を養うため看護師を始め、飲食店経営など多面的な職業経験を経て現職。マインドプロックバスター養成講座も開講し、卒業生を多数輩出。

世界の空気を造り上げてしまい、その空気感だけに依存して行動を起こした結果、引き起こされているのかも知れない。

同書で著者が明らかにしたかったことの一つに、この国は伝統的に場の空気に拠って物事を決めてきた文化性が根底にあることではなかったか。それは今でもクラスメイトの虐めから一国の大事に至るまで、無意識的奥底に横たわっている。

気の置けない仲間と居る時、場の空気で阿吽の呼吸が通ずることは、極めてラクである。そのため、空気を読めない人はKYと呼ばれ疎まれていたが、彼らはむしろ安易な場の空気の形成に一石を投ずる役割を担っている気もする。

恐ろしいのは、冷静な体制批判姿勢を貫くべき報道業界でさえ、世論という「空気」を意図的に誘導しようとしている事ではないか。それは、ロジカルな議論よりも、感情・心境に訴える内容・姿勢ばかりが目立つことから伺えはしまいか。一国の大事は、仮初めにも空気で決したり、誘導しようとする事は、この国の過ちを根本から見直したことはないだろうか。

この国の未来を決めるほどの重要な法定に、無関心を装う層が少なくないのは、報道を始めとする勢力が誘導しようとしている「空気」に乗ることを、暗黙に拒否する姿勢の表れかもしれない。だとすると、この国の民は、実に冷静かつ強かなのだと思う。

福井県において2010年度に実施された「ふるさと商品券」は、総額1.7億円のプレミアム（消費者から見ればお得になる金額）に対して、7.2億円の消費が新たに創造されたと推計された。

消費喚起額がプレミアム額を大きく上回った要因としては、期間限定かつ地域限定のお得な商品券が、欲しかった商品を購入するきっかけとして、県民の消費マインドを刺激した結果と推測される。すなわち、ペントアップ・デマンド（景気低迷下で抑制されてきた繰越需要）と近い将来の需要が、このふるさと商品券により顕在化した可能性がある。

また、県外やネット販売への消費流出を、地域限定の商品券により食い止める効果と、県下全17地域で実施された消費拡大イベントとの相乗効果も、一定程度あったものと評価される。消費者へのアンケート結果によると、日常に比べて商店街での利用割合が高くなったようである。一方で、そこまでの効果が表れていないという声や、日持ちのする生活必需品等の購入に充当され、その後は売上が落ちたという声も聞かれた。

そして本年度、「プレミアム商品券」が各地で実施されている。前回と同様に、期間中は一時的に消費が拡大するとともに、地域小規模店へと一部の消費がシフトする。これを単なる需要の先食いにならないためにも、この効果を好循環させるための工夫が各方面に期待される。

商店側には魅力的な商品づくり・店づくりに加え、ふるさと商品券の取り組み効果を踏まえた積極的な仕掛けづくりも重要になる。地域小規模店は販売促進や商品・サービスの質を向上させるきっかけとするとともに、普段、大規模店を利用している消費者に対し、プレミアム商品券の利用を契機に、大規模店とは違う価値を提供しないといけない。例えば、こだわりの品揃えであるとか、痒いところに手が届くようなサービスであるとか、マニュアルにはない心からのおもてなしやコミュニケーションとかがポイントとなる。

個人消費はGDPの約6割を占めている。消費税率引上げで落ち込んだ個人消費を、行政による補助で浮上させようとする施策自体は意義のあることである。プレミアムによるお得感と、期間限定や地域限定による効果は確実にあり、地域経済への波及効果が一定程度生じるであろう。しかし、行政はそこから一歩進めて、その動きを持続的な確かなものにするための後押しをする必要がある。各地で消費拡大イベント等を仕掛けて、地域のお店とのふれあいや地域の産品を手取る機会を創出して、「買物の楽しさ」や「地域の商品やサービスのぬくもり」等を再発見することに結びつけることで、息の長い消費拡大につながるのではないかと。

8月24日の東京株式市場は、中国経済の減速など世界経済の先行きへの不安感が強まったことから、日経平均株価は先週末より900円近く値下がりしました。株価の急落は世界的に広がっており、世界同時株安の様相となっています。24日の東京市場は、取り引き開始直後から全面安の展開となり、日経平均株価の下げ幅は一時、930円余りに拡大しました。

テレビの街角インタビューでは、今後の世界経済の見通しに悲観的な見解を示している人が多かったですね。でもこの人たちの世界経済って何でしょう。もしかして「金融経済」の事を言っているのではないのでしょうか？それって日本経済、世界経済を表現するほんの一部の指標でしかないですよ。

ある経済評論家が「実体経済（所得）」は、誰かがモノやサービスを生産し、別の誰かが購入しなければ動きません。それに対し、「金融経済（金融資産）」の世界は、「誰かがおカネを借り、株式を買い、値段が上がり、また別の誰かがおカネを借り、株式を買い、値段が上がる」と、資産と負債が同時に増える形で膨張していきます。銀行にじゃぶじゃぶになっているおカネを、政府が実体経済に回さず（それどころか、日本は緊縮財政）、株価頼みの経済運営を続けてきたのが、世界中で限界に達したと考えていい。という話をしていました。全くもってその通りだと考えます。

足元の国民生活では、

- ・円高を強烈に推進した結果としての生活コストの増加、これは裏返せば食という生殺与奪権を外に依存している事であり、恐ろしいとは言えません。
- ・国民の晩婚化と少子化。

コミュニケーションツールが発達した時代であるにも関わらず孤独を感じる層が増加するという矛盾。

働きすぎで婚期が遅れるという説もありますが、高度経済成長期はカオスのような激動な時代であったと想像すると

忙しさというのは理由にならないでしょう。

それよりは、日本の工業化に伴う地方の一次産業衰退、人の大都市圏集中、核家族化が引き起こした積年のつけとも言えます。

あまり長くなると文字のQ数も小さくなってしまっているので、この辺でまとめますと、さも株価が上がると日本国民全員が幸せになるんだと言った政治家や官僚、大企業、マスコミの嘘に騙されず、新たな国力（=国民の幸せ）を計る指標が求められる時代になってきたという事です。マズローではありませんが、今の日本は人間の欲求を満たす五段階の最低レベル

生理的欲求 自分達が食べるものすら自国で賄えない

安全欲求 中・露の大国主義と領土侵犯リスク、凶悪犯罪の低年齢化

の二つさえ満たしていないのに、経済的、尊厳的欲求を満たすのに躍起になっている姿ってどこか哀れですよ。

『富士の国から ~大魔神のたび~』九州視察の旅(6/27~30)その1
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

経済浮揚を行財政支出に頼ろうとしても、福祉、義務的経費に喰われ公共事業にける予算がない。事業は当然滞る。

そこに現れたのがPFI法、議員立法だ。Private Finance Initiative: プライベート・ファイナンス・イニシアティブの頭文字をとったもの。民間の知恵、金を使い、公共事業を行政に代わってやるというものだ。

官民連携の名のもとに、本来学校の敷地であれば、別の用途のものを入れることはできない。図書館があれば人が集まる、そこに気の効いた喫茶があればお客は読書をさらに楽しく、店も図書館の吸引力で流行る、何ならついでに買い物もできるといい。その上に住宅乗せたら、人気の賃貸住宅もできるというもの。よく耳にするコンパクトシティが実現となる。皆、ハッピーじゃないの。

でも古典的法律の前に機能が違うものの寄せ集めなど許される訳はない。ここに風穴を開けたのがPFI法なのだ。面白くないと思ったであろう官僚から横槍が入り、可能性調査なんぞというものに時間をかけるコンサルタントに委託して金もかかる、順調にいった三年もかかるという代物に出し手が少ない。法律改正になり、どうやらもっと早くできるらしい情報をキャッチした。PFI研究会事務局長の伊庭さんをお呼びしての勉強会を早速開くことにした。

役所ができなくなったことを民間にやらせるんだらう、との声も聞く、設計施行、完成後の管理運営も頼む、しかも予算かけることなくという誠に役人にとって都合がいい法律だ。その通り丸投げなのである。

でもこの法律の本意は別にある。仕事の内容から一社でできることではない、企画、設計、施行、管理、メンテナンス、たくさんの業種が関わることになる。これをできならば地元でチームを組んで欲しい。それができれば、このPFI法に基づく事業は工事などで初期にかかった費用を例えば公営住宅のように家賃を充てつつ分割払いしていくものだから30年間といった長い期間となる。であれば30年間はチーム構成員に仕事があるということだ。企業の目的は持続可能な営利を確保することだから都合がいい。

入札、入札に明け暮れ、低価格競争でへばっていき企業がある、こうして地元企業が無くなっていけば、ますます消滅危機度が高まっていく。そう、これは地方創成につながる意味を持っているのだ。

この事に積極的に取り組む町が佐賀県にある。鳥栖市、久留米市そばにあるみやき町だ。人口2.5万人、我が小山町1.93万人と規模的にそう変わらな

い。町長の行くぞの一声で視察に行くことになった。せっかくだから、夜はみやき町長と呑もうではないかとの話になった。6月29日、30日の一泊二日の予定を組んだ。

そこまで行くのなら、年一回は必ず行くことにしている由布院にも顔を出そうと27日から出掛けることにした。北九州空港に降り立った私を福岡県築上町の元農協職員、その前はマツダに勤め技能五輪に板金の部で出場しなんと金メダリストになった信田さんが迎えに来ていてくれた。

手に包帯を巻き痛々しい姿に驚いた。腱鞘炎治療の手術をしたばかりというのだ。申し訳ないと思いつつも、北九州の世界産業遺産候補の旧八幡製鉄の高炉を見せに連れていってくれ、ついでに焼きカレーも食べたいと遠慮のない注文を出してしまった。関門海峡が見える場所で焼きカレー、ご飯の上にカレーにチーズを載せオープンで焼いたカレーのこと。想像しやすい味である。



世界産業遺産をめざす「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」。北九州市からは、1901年に創業した官営八幡製鉄所の関連施設がその構成資産となっている。それらは、製鉄所の構内に立地しているため公開されていないが、構成資産のひとつである旧日本事務所（1899年竣工）を眺望できるスペースがある。その後まもなく7月5日に世界遺産登録が決定した。ここを見に行けばよかったが、最初に目にした高炉に吸いつけられるように「東田第一高炉史跡」に行った。機械工学も学んだこともある小生にとっては何とも嬉しい存在なのだ。



その高炉のてっぺんには「1901」と大きく書かれている。明治34年（1901）2月5日の官営八幡製鉄所東田第一高炉の火入れを記している。当時はドイツから技術者を招き、製鋼から製品までつくる一貫製鉄所として建設された。その後、埋立地・洞岡にも高炉を建設、昭和9年（1934）には日本製鉄の中では最大の事業所となった。戦後復興に「八幡の鉄」は生産を伸ばし、ピーク時の昭和40年代前半には八幡地区6基、戸畑地区4基、計10基の高炉が稼働、粗鋼生産は年900万トンに上った。その後、生産拠点の移転や合理化の影響で、昭和53年には高炉はすべて戸畑地区に集約、現在保存されている高炉は第10代として昭和37年に建設されたもの。周辺は史跡広場として整備され、銑鉄を運ぶトールカーや鋼鉄を作る転炉なども展示されている。（つづく）

